許六『追善註千句』翻刻と略注（一）

牧　藍子
藤井　美保子

『追善註千句』は、彦根藩士である森川許六が師芭蕉の一七回忌に巻いた独吟千句に自ら注を施した作品で、宝永七年（一七一〇）一〇月一二日付の自序が付されている。本作は、既に尾形仂「許六自註「追善註千句」とその附合意識について」[1]に紹介されているが、テクストとしては論旨に関わる箇所が引用されるにとどまる。しかし、本作の許六自注にはかなり踏み込んだ内容のものもあり、『俳諧問答』をはじめとする他の俳書に展開された許六俳論と密接な関連が認められる。また、弟子たちが書写することを意識してか、付筋の解説も丁寧である。許六自身や彦根蕉門の俳風はもちろん、蕉風俳諧の理解にも資する重要な資料であることから、全巻を通じて翻刻することとした。

本稿で底本とするのは、享保八年（一七二三）三月の奥書をもつ、彦根城博物館蔵『註千句』（番号２４０４・調査番号B6-a-142）である。署名等はないが、彦根城博物館古文書調査報告書Ⅵ『平田町町代中村家文書調査報告書』（彦根城博物館、一九九九年三月）には「逸丸書写」とあり、彦根藩士で許六の道統を継承した冶天の門弟である、中村逸丸という人物が筆写したものとされる[2]。内容は許六自序、自注を加えた百韻十巻、追加の当日追善半歌仙で、大きさは縦19・2センチ横14・2センチである。

尾形氏の紹介しているものは、同じく冶天の弟子で、専宗寺（滋賀県彦根市鳥居本町）の住職であった林篁（享保九～天明七・一七二四～一七八七年）による筆写本で、延享四年（一七四七）一一月一八日の奥書がある。冶天が没したのは延享四年一一月二五日であるので、冶天の没する七日前に写されたことになる。尾形氏の指摘の通り、林篁が師冶天の臨終に際して、彦根蕉門の祖たる許六の道統を受けるべく書写に臨んだものであろう。この専宗寺蔵本は現在所在不明となっているが、尾形氏が本書を臨模したものが、彦根市立図書館に収蔵されている。許六の自筆稿本が発見されていない今、所在が確認できる『追善註千句』は、尾形氏が林篁筆写本を臨模した彦根市立図書館所蔵本と、逸丸筆写とされる彦根城博物館蔵本の

二点のみである。なお、彦根市立図書館蔵本は、筆勢や虫損までを正確に透き写ししたものである。

専宗寺蔵本について、尾形氏は前掲論文中で、林篁が許六自筆の原本を直接筆写したものであると推定している。

林篁の写本には一、二筆写の際に底本を訓みかねて「本書不明」の頭書を加へた箇所がある。他の写本の場合における林篁の筆写態度を見るに、冶天写本によったものと直接原本によったものとは区別して、「本書」とは原本の場合についてのみ呼称してゐる例から推し、また冶天が許六から多くの稿本を相伝している事実（「横平楽」）から考へて、恐らく林篁は原本によってこれを筆写したものと考へてもよいのではあるまいか。

尾形氏が林篁筆写本を許六原本の写しとみる根拠は、頭書の「本書」という注記にある。ここで尾形氏が問題としている頭書は、第三百韻初折裏七句目の部分に書かれたもので、注の中の「かやふらし」に関して、「通ふらしか。本書不明。」と疑問を呈したものである。林篁筆写専宗寺旧蔵影写本の「かやふらし」の箇所を見ると、一度「かふらし」と書写した後、「か」の右下に小さく「や」を補うような書き方がなされている（図一）。一方、逸丸筆写本では、当該箇所は「かよふらし」と記され、逸丸が書写に用いた底本には「かよふらし」とあったと考えられる（図二）。以上をふまえた上で、再び林篁筆写専宗寺旧蔵影写本の頭書を見ると、林篁が参照している本では、本来「かよふらし」とあるべき箇所が「かふらし」となっていたため、一度は「かふらし」とそのまま写したものの、後から右傍に「や」（正しい仮名遣いとしては「よ」）を補記したのではないかと推定される。つまり「本書不明」とは、「本書＝許六の原本」に、なぜ「かふらし」とあるのか不明であるという意味ではなく、「本書＝許六の原本」の中身を確認できていないので、原本ではどう書いてあるか不明であるという意に解されるのである。そうであるならば、林篁は許六の自筆稿本を筆写したのではなく、直接の師である冶天が書写した『追善註千句』を写した可能性が高い。

また、本句の注には、俊成女の作として『拾遺和歌集』所収の和歌（雑上・四五一・斎宮女御）が引用されている。この歌についても、逸丸筆写本では「琴の音にみねの松風かよふらしいつれのをよりしらへそめけん」と正しい形で引用されるのに対し、林篁筆写専宗寺旧蔵影写本では「いつれの」とあるべきところに「いつれか」「おもひの」が並記されている。

右の例のみから判断すると、逸丸筆写本は林篁筆写本とは底本を別にし、しかも逸丸筆写本の底本は林篁筆写本の底本より善本である可能性が高いといえよう。しかし、用字の違いは多々見受けられるものの、逸丸筆写本も林篁筆写本もテクスト自体の差異は大きいとはいえず、さらに誤記のありようなどからは、両書が同一の本を底本としていると推定される節もあり、慎重な判断を要する。そこで本稿においては、両書と許六の原本との関係を明らかにすることを目的に、現在のところ書写年が最も早い逸丸筆写本を底本に翻刻

した上で、尾形氏による林篁筆写専宗寺旧蔵影写本と対校して校異を示すこととした。

他に許六自注が省かれた形ではあるが、本作の第九、第十百韻がそれぞれ石介・巨郭編『木葉漬』（享保二〇・一七三五年序）覧陳・九隅編『獏の華』（寛保元・一七四一年序）に収録されている。許六の道統を継いだ人物には、冶天の他にもう一人、九州・中国地方に彦根蕉門の勢力を広めた孟遠という人物がおり、石介・巨郭・覧陳・九隅の四人はいずれも孟遠門の備前国岡山連中である。『獏の華』は孟遠一三回忌集、『木葉漬』は孟遠七回忌の年に刊行された俳書である。『木葉漬』『獏の華』に収められた『追善註千句』のテクストは、逸丸筆写本や林篁筆写本のテクストとかなり近似しているが、完全に一致するわけではなく、また自注が省略されていることもあって、底本の素姓については今回検討が及ばなかった。許六の『追善註千句』は、許六の弟子たちが俳諧修行の一環としてそれぞれ書写していることも予想されるため、冶天系とは別の孟遠系の写本によっている可能性も視野に入れて調査を続けていきたい。（牧　藍子）

【凡例】

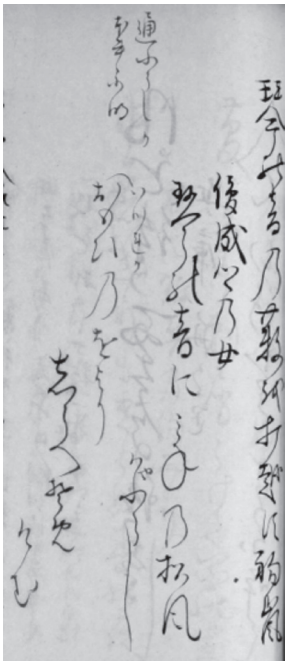
一、句頭に番号を付した。
一、本文の行移りは、序文のみ原本にしたがった。
一、振り仮名・送り仮名・濁点は全て底本のままとし、句読点などは私に付した。
　明らかに誤字と認められる文字には（ママ）と傍注した。
一、漢字は原則として現行の字体に改めたが、一部そのままとした。
一、片仮名は「ハ」「ミ」など、変体仮名と認められるものは平仮名に改めたが、小文字で記されたものなど一部そのままとした。
一、仮名・漢字のおどり字「ゝ」「〻」「〳〵」はそのままとし、漢字のおどり字は「々」で示した。
一、※に逸丸筆写本に関する注記を示した。
　△に林篁筆写専宗寺旧蔵影写本との校異を示した。
　◎に句の季などを示した。
　○に略注を示した。

注

（1）『日本文学教室』四号、一九五〇年一〇月。
（2）中村逸丸に関しては、藤井美保子「彦根蕉門の系譜・中村逸丸の存在―平田町町代中村家文書から―」（『成蹊人文研究』第一七号、二〇〇九年三月）に詳しい。

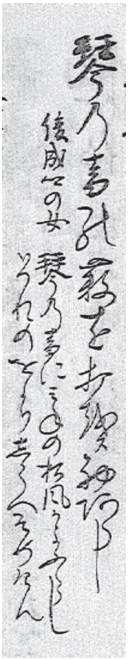
本稿を執筆するにあたり、ご意見を賜りました田中善信先生、芭蕉無村研究会の諸先生方に深謝申し上げます。また、資料を提供して下さいました彦根城博物館、彦根市立図書館及び伊藤善隆氏に厚く御礼申し上げます。

【図一】林篁筆写専宗寺旧蔵影写本



琴の音の藪を打越す初嵐
　俊成卿の女
　琴の音にみねの松風
通ふらしか　　かやふらし
本書不明
「いつれか
おもひのをより
　しらへそめ
　　けむ

【図二】逸丸筆写本



琴の音の藪を打越ス初あらし
　俊成卿の女　琴の音にみねの松風かよふらし
　いつれのをよりしらへそめけん

【翻刻・略注】

序

連歌の注千句は、宗長・宗碩の両吟、俳諧には守武千句、何かしか湯ノ山千句、花千句、古風の崩れ口には談林の千句あり。紀子か大矢数は一夜千八百韻、加賀の一笑は末後に親の追善の独吟十三巻せむといひて、九巻にて臨終を遂たり。昔より名ある達人、独吟の千句なきはなし。物喚（ママ）星移りて、百韻をさへ下手の長談義とて哥仙にちゝめ、猶面合・半歌仙はやく出来るを手柄とす。されは百韻の俳諧のすべをしらす。まして千句は猶しらす。今年、神無月十二日は開山蕉翁の十七回忌にあたれり。（余）病中のおこたりを偸み、独吟の千句に注を加へ、彼追善となせり。備（ママ）へる亡者は古人らの名人、此人に注を加へて聞給へといふは、下手か上手か我もしらす。若此俳諧嘘ならは、すみやかに今日出給ひてわか迷ひを明しめ給へ。又尊霊の御心（ミ）にかなひ侍らは、かさねて御左右は御無用たるへし。弟子菊阿謹で述。

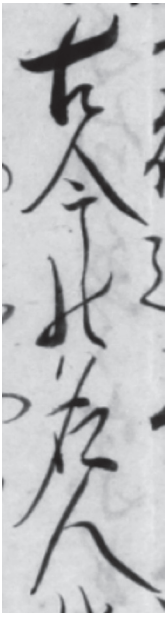
宝永七庚寅年十月十二日

※「古人らの名人」は「古今の名人」の誤記か。

△「古今の名人」

【図三】逸丸筆写本

【図四】林篁筆写専宗寺旧蔵影写本



○宗長・宗碩の両吟　伊勢千句。大永二年（一五二二）八月四日から八日まで伊勢神宮で興行された。○何かしか湯ノ山千句　不明。○花千句　季吟・湖春・正立による三吟千句。延宝三年（一六七五）八月一日成。○紀子　月松軒紀子。大和国多武峯寺西院の僧。延宝

六年『大矢数千八百韻』を刊行。後に東下して、桃青らと一座した四吟歌仙が『江戸通町』（延宝六年刊）に載る。○一笑の臨終の九巻不明。独吟俳諧の千句としては、立圃が亡父追善のために編んだ『追善九百韻』が著名。これと混同したか。また自注という点では、貞室の作品も有名である。貞室に言及せず、一笑に言及する点は注意される。○物喚星移　物換星移。歳月が過ぎ、世の中が移り変わること。王勃「滕王閣」に「閑雲潭影日悠悠、物換星移度幾秋」（延享四年刊『王勃集』）。○面合　表合。百韻の表八句のみをもって一巻とするもの。本来、表に禁じられている題材をも取り入れ、去嫌の制も緩めて、表の内に一巻全体の変化を盛り込もうとした形式。支考の創出。

追善註千句

第一

1 くはら〳〵と猫のあかるや梅の花

凡骨を離れ妙処に入。大曲の句なり。更に凡俗の及ぶ所にあらす。

△「句也」「更に」

◎「梅の花」（春）

○大曲の句　曲のある句とは、技巧の凝らされた目を引く句。『去来抄』に去来の言として「初折の裏より名残の表半までに、物数寄も曲も有べし。半より名残の裏にかけては、さら〳〵と骨折ぬやうに作すべし」とある。

2 日は永うなるうくひすの声

是又曲なり。哥に、誰きけと永き日あかす高まとの尾上の宮の鶯の声。

△「曲也」「歌ニ」

◎「日は永うなる」「うくひす」（春）

○誰きけと　三条西実隆「誰きけとながき日あかず高円の尾上の宮のうぐひすのこゑ」（雪玉集・一二五）。

3 春もやゝ紙子の礼のいほひ出て

いにしへはケ風躰の句、述懐と号し侍れと、今やう何の述懐かあらん。紙衣（コ）の礼は隠者也。正月廿日過の年礼なるへし。

※「ケ風躰」は「ケ様の風躰」の意か。

◎「春」（春）

○紙子　紙で作った衣服。○廿日過の年礼　隠者なので、年始の挨拶の訪問が遅い。

4 大（イカ）い蕪（カブラ）の自慢たら〳〵

隠士か住る里のかふらを自慢の句なり。冬としの音物の

礼、今此つゐてに謝したる返答なるへし。
△「句也」「返（ヘン）」
◎「蕪」（冬）
○音物　ここでは歳暮の贈り物。

5 初雪もことしは遅き冬天気

◎「初雪」「冬」（冬）

6 塒出（トヤデ）の鷹のきほふ鳥年

はし鷹のとや出は七月也。此とや出は冬の鷹野の朝をいふ。鳥年と云あしらひに知へし。一句のあたらしみ、鳥年の詞にあり。
△「はし鷹の塒出」「此塒出」
◎「塒出の鷹」（秋）ただし、ここでは自注にある通り、冬の朝の景。
○はし鷹のとや出「総て夏より羽のぬけたるを鳥屋に籠て、七月に出すを鳥屋出の鷹と申ならし。」（『滑稽雑談』正徳三・一七一三年序）。
○あしらひ　前句にふさわしい句を付けるために、前句の詞と関係する語を付句に配するもの。ここでは、前句の「ことし」に対して、「鳥年」の語があしわられている。

7 早物に野は明ク比の朝月夜

早物は早稲にかきらす、畑物をもいふ百姓の詞、是又一句のあたらしみ。鳥は野の明クを待て渡る物なり。明クは夜の明るにあらす。
△「早稲（ワセ）」「物也」「明ル」
◎「朝月夜」（秋）
○早物　わさもの。野菜・果物などの、季節より早くできるもの。
○朝月夜　有明の月。

8 相撲のあとのあたる傀儡（アヤツリ）

当世、仕合のよき事をあたるといふ通俗也。秋は必ス相撲あやつりをやとひて村々の賑ひとす。
△「かならす」
◎「相撲」（秋）
○相撲　村の祭礼などの際に催された相撲興行。○傀儡　操芝居。

ウ

9 菅笠に似せむらさきの後帯

いなか女の風俗、似せむらさきといふ所をみるやう躰（ママ）と旨とす。
※「みるやう躰と」は「みるやう躰を」の誤記か。
△「田舎女」「見るやう躰を」
◎「後帯」（恋）か。
○みるやう躰　対象を眼前に見るように仕立てた平淡な詠みぶりを

指す歌論用語。連歌論・俳論にも用いられる。『宇陀法師』に許六の言として「哥に「景曲は見様躰に属す」と定家卿もの給ふ也」と見える。

10 おうらの法事下はどや〳〵

此句は京也。下は下京をいふ。おうらは東本願寺也。おうらにあたらしみあり。

△「新しみ」

11 暖簾に本屋の見世の輪袈裟達

本願寺の僧おほくは白衣に輪けさ多し。おうらの法事、本屋よき比の物也。

△「わげさ」

○輪袈裟　略式の袈裟。幅六センチメートルくらいの布を輪形に作り、首から胸にかけてたらす。

12 抓み肴に酒の挨拶

是は年来懇意の本屋、つまみ肴は取あへぬ事也。

○つまみ肴　親しい間柄なので、すぐ出せる簡単なつまみでもてなす。

13 近付に請人宿の嚊が出て

此句江戸なり。酒の時、乳のみ子を抱きてかゝが出たるは出替前の事なり。

△「江戸也」「事也」

○近付　知り合うこと。また、知り合い。○請人宿　奉公人の周旋をする業者。○出替前　出替わり前は請人宿の掻き入れ時であるので、主人の妻も出てくる。江戸の出替わりは古くは二月二日、八月二日が慣例であったが、次第に三月や九月にも行われた。

14 医者の迎ひの馬の口とり

小身の籏本、医者・針立の迎ひは必馬（ムマ）なり。

△「馬也」

15 切売に西瓜の銭のたはこ入

木戸きはの切うり、烟草入の底をたゝきて残暑を忘れたり。

◎「西瓜」（秋）

○木戸　江戸市中の表通りの町境に建てた門で、出入りする人や荷物の取り締まりを行った。人通りが多いので西瓜の切り売りの店が出る。

16 箱根の駕篭も小田原の月

乗物打越てあしゝ。見おとし也。箱根ゟ出て小田原の月、よきむすひなり。

△「むすひ也」
◎「月」（秋）
○打越てあしゝ　乗物が打越に重出。通例は避けるべきところ。

17 石垣も地震の跡の秋の風
◎「秋の風」（秋）
○地震　宝永四年一〇月に起きた宝永の大地震。

18 夕蔦赤く雨乾くなり
哥に、山ふかみ落てつもれる紅葉々のかはける上に時雨ふるなり。能因、長能に哥の道を問ける返答申たる哥也。是より哥道に師弟を求る始といふ。
△「紅葉葉」「ふる也」
◎「蔦」（秋）
○山ふかみ　『詞花集』冬部の大江嘉言の作。能因が藤原長能と初めて対面し、和歌はどのように詠むべきかを尋ねた際に、長能が当該歌を示した逸話が『袋草紙』に載る。

19 味をやる若衆に化る猿打て
深山猟師の鉄炮也。猿の化たるはいつれの咄にも皆若衆なり。
◎「若衆」（恋）
○味をやる　ここでは生意気にも若衆に化けた猿を打ったということ。

20 行-道-山の麓行川
行道山は下野の足利にあり。いにしへの学校、今寺となる。深山なり。仏法僧といふ鳥なくといふ。
○行道山　音読符が付されるので「ぎょうどうざん」と読む。中腹に臨済宗妙心寺派の浄因寺があり、その山号でもある。

21 ひたるかる所化の吐息に花も散リ
手一合の所化、三月は目ほしの花も散へし。
◎「花」（春）
○所化　修行中の僧。○手一合　両手でひとすくいした約一合分の米。また少量の米。○目ほしの花　目星の花。空腹で目がかすみ、星のようなものがちらついて見えることを、桜の花が散ることにかける。

22 年始の状の届く遠-国
△「遠国」音読符なし。
◎「年始の状」（春）

二

23 食粒に壱歩の桐の残る雪

年玉の一歩へはり付たる食粒には、桐のたうの手きは残るは例也。

△「へばり付」

◎「残る雪」（春）

○一歩の桐　一分判の表面には、上下二つの桐紋が入っている。米一石は銀約五〇匁、現在の米価を一〇キログラム約五千円として換算すると、金一分はおよそ二万円相当。年玉にもらったうれしさに、桐紋の形を飯粒に押し付けてとってみた。○桐のたう　桐の紋所のこと。

24 役者衣紋の門跡の使者

役者衣紋といふ衣紋つきあり。一歩は使者の引出もの也。

△「引出物」

○役者衣紋　不明。○衣紋つき　着物の着こなし。

25 供先は皆雇人で博奕打

手従者は草履取一僕なり。上下の者、馳走宿もはゝからぬはいつもの事也。

○雇人　やとうど。

26 赤手すらする宿の馬士

似せ武士の権柄は問屋、馬かた、よく見知りて却而赤手をすらする。

○赤手すらする　「赤手を擦る」で、もみ手をしてあやまること。

27 犬走リ念を入たる彦根領

彦根領の馬かた、乗打大キなる法度也。

△「大キ」

○犬走リ　犬が通るほどの小路。○乗打　馬や駕籠など、乗物から降りないでそのまま通行すること。

28 朝鮮人の参る御馳走

てうせん人の御馳走、彦根領天下一番。

○朝鮮人　琵琶湖の東岸に、朝鮮通信使が来朝した際に通行した朝鮮人街道と呼ばれる道があった。許六の存命中では、天和二年（一六八二）と正徳元年に来朝している。

29 役しけき村のつかれに田はあせて

朝鮮人の来朝、天下一統の困窮。

△「朝鮮人ノ来朝」「天下一流困窮」

30 上下で出る門屋（ママ）きもいり

京都司代（ママ）の道中、又は国廻リの御目付、問屋きもいり、物やかましく宿のこんきふを訴ふ。

※「門屋」は「問屋」、「京都司代」は「京都所司代」の誤記。

△「上下て」「問屋」「京都所司代ノ道中」「困窮」

○問屋　問屋場。宿駅で人馬の継立などを行う施設。

31 立傘に対の道具の旅馴て

旅なれよし。

○立傘　長柄の大傘。大名行列などの際に供の者に持たせ、雨、日よけのほか、儀式にも用いた。○対の道具　大名行列で対に揃えた道具類。

32 大浜茶屋の鎖の雪隠

鎖の雪隠は大名を待なり。旅の新しみ、平人はやらす。

△「待也」

○大浜茶屋　大浜街道（愛知県碧南市から豊田市方面へ塩を運んだ塩街道）と東海道が交わる地点に栄えた茶屋。○鎖の雪隠　錠のついた雪隠。

33 山吹のしらけて落る鳥の声

△「残る鳥の声」

◎「山吹」（春）

34 岩茸取リをおろす陽炎

谷川の切岸、通路なき所へは上より篭に入ておろして岩茸をとる。いちこ、山吹も盛なるへし。

◎「陽炎」（春）

○岩茸　地衣類の一種で、深山の岩壁に着生する。採取するのに大変危険をともなう。

35 入残る雲に碁石の春の月

碁石心なし。春の月の入残りたる風情をいふ。

◎「春の月」（春）

36 供寝過して網代引出す

網代は車なり。忍ひ車を云。迎ひものゝ寝過して夜明て帰る見くるしさをいふ也。こなしの句也。陣事大裏沙汰、こなしを第一とす。口伝。

△「引出ス」「車也」「いふ」「陳事」

◎後朝の情景から恋。

○網代　網代車の略。牛車の一種で、車箱の屋形の表面に網代（竹や檜を薄く細く削って編んだもの）を、張ったもの。○陣事　戦のこと。○こなし　くだいて平明にすること。『旅寝論』に「言の平懐（コナシ）」。

『正風彦根躰』「借銭涅槃経」（汶村作）に「先師教て曰、陣の句・禁中沙汰の句は必ずこなしてすべし。こなさねば全く古手に落るといへり。」とあり、彦根俳諧において重視された。

二ウ

37 走り行昼の惣嫁の見知リ越

青侍、舎人、近付に見付られ、かならす走リ出したる也。

△「近付ニ」

◎「惣嫁」（恋）

○見知リ越　かねてから見知っていること。○惣嫁　路上で客を引く最下級の娼婦。ここでは客となったことのある者に、昼間顔を見られたくなくて走り去ったか。

38 ぐはさりと砂に落す銭ざし

走行といふ所に心を付へし。

○銭ざし　銭貨は穴に紐を通してまとめて保管したり運んだりした。百文差（ざし）、三百文差、一貫文（千文）差など。

39 帷子に木綿ふとしの高むすひ

郷人のいやしきを句作の旨とす。

△「高むすび」

○ふとし　ふどし。ふんどしのこと。

40 真言寺の黒き御秘蔵

田舎寺の小ざうり取、真言宗命也。

△「小ざうり」が「ざうり」

◎「御秘蔵」（恋）か。

○小ざうり取　江戸時代、男色を目的に、草履取の名目で武士がかかえた美少年。ここでは、御秘蔵とはいっても、田舎の寺のことなので日焼けしている。

41 織物の鼻紙入もおもひ草

思ひ草といふは恋のあしらい。今織とんすのから草を云。

△「から草をいふ」

◎「おもひ草」（恋）

○今織とんす　当世風の緞子。「思ひ草」に緞子の唐草模様をきかせる。

42 昼食くいにもとる出替り

奉公人宿のはな紙袋、よき付合也。

◎「出替り」（春）

○奉公人宿　奉公人の周旋をする宿で、奉公人はここを宿元とした。また宿下がりや奉公人同士の逢引にも利用された。

43 春雨のぼち〳〵顔に音信て

足駄、からかさの思案もさたまらす。

◎「春雨」（春）

44 花みをひらくぬり物のふた

しんこぼた餅の花見をいそく。雨にぬり物よし。

△「花見」

◎「花み」（春）

○しんこ　糝粉餅のこと。

45 おし合て子共は吃（キツ）とかしこまり

くはふ〳〵と思ふ顔つきおかし。

△「吃」ルビなし。

46 殿の御能をほめる医者衆

47 名月の庭にかけろふ風の音

其夜の気しき。

△「かけらふ」

◎「名月」（秋）

○かけろふ　月の光がほのめいている様子。

48 先湖に休むはつ雁

越路の山をはる〳〵こえて、湖の堅田に必休と云。

△「初雁」「やすむといふ」

◎「はつ雁」（秋）

○堅田　「堅田落雁」は近江八景の一。

49 黒稗（ヒヘ）の早稲より早く穂に出て

黒稗といふもの、あたに聞へからす。

△「といふ物」

◎「稗」「早稲」（秋）

○黒稗　稗のうち種子が黒いもの。当時の認識として、他にさきがけてまず穂を出すものであったか。

50 鯖をはねきる盆も来にけり

はねきるといふ詞にて、一列には入り、是をあたらしみといふ。鯖売に来る鯖を呼込なとせは、一列には入へからす。あたらしき事なき時は、必新しみを付ていふ事なり、と師説には申されけり。

◎「盆」（秋）

○鯖　江戸時代、親のある者は盆の日に魚類を食べる風習があり、多くは塩漬けにした刺鯖を用いた。刺鯖はまた、盆の贈り物にも用いられた。○はねきる　はね上げるように勢いよく切ること。

三

51 嶋原のくつわたふれて道具市

此句まへ句に付ず。嶋原の盆前に鯖をはねきるといふ句、前句の乗・いき合、是より外にあるへからす。当流の眼なり。此乗相通せぬ人ははいかいすへからす。

△「前句ニ」。

◎「嶋原」（恋）

○くつわ　遊女をかかえておく家。○乗・いき合　連句の呼吸。

52 四の二の宮の御筆ほり出す

むかし四の二の物語といふうたひ物あり。是は八ノ宮の御製作なり。其詞の発端、是は四ノ二ノ物語とあり。

△「四ノ二の物語と有り」

○四の二の物語といふうたひ物　不明。

53 笠付の点も淋しき俳諧師

はいかいの点者かたみせは取売をする。近代都の風俗なり。

△「俳諧ノ点者片見世」「風俗也」

○笠付　雑俳の種目の一つで、五文字の題に中七下五を付けるもの。江戸では冠付・烏帽子付と呼ばれる。○かたみせ　商店の一部で、本業とは違う商品を副業的にあきなうこと。ここでは笠付点者が副業として、取売（古道具屋）を営んでいることをいう。

54 日用の札の落る軽衫（カルサン）

是は江戸の俳諧師也。八徳をぬいて、立処に高宮嶋のかるさんにかはる。

△「高宮しま」

○日用　日用取の略で日雇い人のこと。江戸時代、日雇稼ぎの者は日用座に役銭を納めて許可証の札を受け取った。○八徳　俳諧の宗匠や画工などが着た胴着で、十徳より品が下がるとも。ここでは、八徳から動きやすい軽衫に着替えて副業についた。○高宮嶋　彦根南部高宮で産出する上布。

55 薏珠仁に水道橋の夏の風

苡

御茶ノ水、水道橋の土手、誰植るともなくて年々じゆす玉生せり。はいかいはケ様のたくひ見覚えてかしこくするを、目の黒きといふ。ケ様之前句、しゆす玉にかきらす。江戸をよくいふを手からとす。

※「水道橋」の前二字分を墨抹。「前句、しゆす玉」の「す」は右傍に補う。

△「御茶ノ」に傍線なし。「水道橋ノ」「ハイカイはケ様」「見覚へ」「ケ様の前句」「手栖」

◎「薏珠仁」「夏の風」（夏）
○薏珠仁　薏苡仁の誤り。じゅず玉のこと。「柳、柊、楪葉、桃の木、はな菖蒲、薏苡仁など取まぜて植置しは」（『日本永代蔵』貞享五・一六八八年刊）。○水道橋　芭蕉は副業として小石川の水道工事に従事したことがある。「嘗テ世ニ為メ遺レ功ヲ。修メ武ノ小石川ノ之水道ヲ四年ニ成ル。」（『風俗文選』宝永三年刊）

56 塩干の舟の泥に居すはる

水道橋より四ツ谷、牛込まて塩の満干あり。

◎「塩干」（春）

57 御関所もまだほのくらき五位の声

一句の余情、まだほのくらき所にあり。御関所遠州あら井にかきるへからす。行徳の川筋も関といふなり。

△「いふ也」
○御関所　江戸川左岸の本行徳村には、当時川関が置かれていた。南は海に面して塩浜となっており、特産の塩を船で江戸に運んだ。
○五位　五位鷺。全長約六〇センチメートル。夜行性で、夜、魚・カエル・ザリガニなどを捕食する。

58 刀飛脚の石の飛乗

飛脚にさま〳〵あり。無刀、一本さし、刀飛脚は大名の飛脚なり。から尻の飛乗、かならす石を目あてとす。

△「有リ」「飛脚也」
○から尻　軽尻。空尻。人が乗って、五貫目までの荷物をつけることのできた駄賃馬。○目あて　ここでは石を踏み切って馬に飛び乗ること。

59 取廻す比丘尼の中の小山伏

道中比丘尼の多き所にかならす山伏有。

△「多き所には」「有リ」
○取廻す　取り囲む。○比丘尼　道中にある比丘尼の多くは、物乞いする許可を受け、旅行者から布施を巻き上げて生業としていた。熊野やその近国に多く、山伏の妻や娘である場合もよくみられる。「山伏は至る所で比丘尼の群れに混って、ミツバチの大群のように旅行者の周りに集まり、一緒に歌をうたい法螺貝を吹き鳴らし、熱弁をふるい、あるいは大声で叫ぶ」（ケンペル『江戸参府旅行日記』東洋文庫）。○小山伏　まだ修行中の若い山伏。

60 苅田の跡の鶴の横平（ワウヘイ）

伊勢路、白子、松坂のほとりか。

△「横平（ワウヘイ）」
◎「苅田」（秋）
○横平　横柄。

61 渋柿の色つくうへに雨晴て

秋の末、冬のはしめをいふ。

△「冬ノ始メ」

◎「渋柿」（秋）

62 茶園ぬけれは宇治の夕月

宇治の入口、左右皆茶園。中にころ柿の木あり。

△「宇治ノ入口」「有リ」

◎「夕月」（秋）

○ころ柿　干し柿の表面に、糖分の白い粉がふいたもの。

63 金入レて伏見通ひの小脇指

浮気（ウハキ）なる茶師のわか者。

△「浮気ナル茶師ノ若ヵ者」

◎「伏見通ひ」（恋）

○伏見通ひ　撞木町の遊郭に通うこと。『好色一代男』巻一「尋ねてきく程ちぎり」に、伏見に通う宇治の茶師が出てくる。

64 新元服の恋のあをさよ

青きの一字、肝要なるへし。

◎「恋」（恋）

○新元服　元服したてをいうか。

三ノウ

65 紅（アカ）裏をかくせとくはつと袖の奥

むつかしとつゝまむよりは着ぬかよし。恋のあをさに場所をしらす。

※「つゝまむ」の「ま」は右傍に補う。

66 亭主海老引一門の節

此亭主は伯父か舅か。おそろしき亭主なるへし。

◎「節」（春）。

○海老引　ここでは亭主自ら節振舞のエビをふるまうこと。

67 炭頭火鉢に烟る春の風

◎「春の風」（春）。

○炭頭　炭の中で上質なものもいうが、ここでは「烟る」とあるので、十分に焼け切っていないもの。

68 鼓は下（サゲ）てふらと永き日

四番目、五番目の下手役者、待とをなるへし。

△「下（サゲ）」

◎「永き日」（春）

○下手役者　ここでは能の囃子方。江戸時代、能は一番目から五番目まで一日がかりで上演されていた。

69 湯に入て芝居へ出る数役者

是は哥舞妓役者の大つゝみ打外ニ芸なし。されと一枚看板も、朝はかはらす銭湯に入ル。

△「芸」「一枚看板と」

○数役者　端役の役者。○一枚看板　一座において中心的な役者。

70 女中で包む武士の奥方

主従慥かならぬやうに作れり。典薬の薬にて半はは快気をせられたると見えたり。

△「見へたり」

◎「奥方」（恋）

○武士の奥方　武家の女性にとって歌舞伎見物は慎むべきものであった。芝居見物中にのぼせて倒れたか。

71 夕立に雷門の雨やとり

是は江戸なり。奥方家老にさし添、年寄のちりめん医者、跡は同勢の鑓馬なり。

△「年寄」

◎「夕立」（夏）

○ちりめん医者　評判のよい流行りの医者。

72 精進旅篭に涼む浅うり

金龍山の精進はたこ、浅うり勝のなますも涼し。

◎「涼む」「浅うり」（夏）

○金龍山　浅草寺の山号。○浅うり　しろうりの別名。

73 高野道鵙野も聞は秋立て

高野海道の旅篭は皆精進也。

△「鵙野と」「旅篭」ルビなし。

◎「秋立」（秋）

○鵙野　大阪から高野山に向かう高野街道沿いに「もず」という地名がある。

74 綿実買が綿の世の中

大和河内。

◎「綿実買」（秋）

○大和河内　綿の中心的な産地。

75 冬近き月のひつみに山の形

やり句。

◎「冬近き月」（秋）

76 より屑になる霧原の駒

するとなる山の下に霧原、望月なとやさしき牧あり。駒の最上とす。都へとられたる跡には牛房馬といふ物斗残りて、霧原の形も見えす。

△「見へず」

◎「霧原の駒」（秋）

○霧原、望月　いずれも信州の名馬の産地で、駒牽の儀式ための馬を献上した。貢上馬を逢坂の関で出迎えたのが駒迎で、中秋の名月頃に行われたことから、和歌では月と関連して詠まれる。

77 初花にむかしの杉の伐（キリ）残し

木曽路の山〳〵見え渡りたる所に大木はなし。されと川岸片岨なと伐にくき所にや、軽忽の大木、昔のきり残しと見えたり。

△「見へ渡り」「むかし」「見へたり」

◎「初花」（春）

○片岨　断崖。○軽忽の大木　ここでは伐り残されてむやみに大きくなった杉。

78 漆もかゝす山の春寒ム

是は吉野なり。漆かく、あたらしき道具也。

△「吉野也」

◎「春寒ム」（春）

○漆かく　樹幹を傷つけ漆汁を掻き取る作業で、一般に暖かい時期に行われる。『糸屑』『をだまき綱目』『誹諧新式』など元禄期の歳時記には九月に掲出。○道具　句の素材。「さん銭の道具めづらしとも好しとも申にてはなく候へども、落葉に取おとしたるけしき、其場を得たり。」（元禄八年一月二九日付許六宛去来書簡）。

名ヲ

※「ヲ」は墨抹跡の右傍に補う。

79 粟酒の酔はのほりてあたゝまり

粟酒は焼ちう也。上州佐野辺をいふ。

○粟酒　粟で作った酒。『古今著聞集』巻十七、五九九「承安元年七月伊豆国奥島に鬼の船着く事」に、船に乗ってやってきた鬼に島人が粟酒を与えた話が載る。○上州佐野　寛永一〇年（一六三三）に江戸の賄料として近江彦根藩佐野領が成立した。

80 八丈着ても都恋しき

八丈嶋の流人、粟酒にも呑あきたり。

※「都」は誤字で記される。

81 年はまだ受領の妻の鬢の雪

何かし伊豆の守か妻、六年過て帰洛せしに、田舎住居にやつれ果て、人々あはれと見たり。

△「人〳〵」

◎「妻」（恋）

○伊豆の守か妻　不明。『源氏物語』に登場する受領の伊予守か。

82 娘をもらふ法華友達

受領の妻の田舎めきたるに、宗旨さへかた意地なる法花なり。

◎「娘」（恋）

83 身代は無尽たふれに薄うなり

度々の大火事、無尽のかけたふれ、心は昔の奢にかはらす。

○無尽　無尽講。複数の講に加入したものの、大火事が頻発し、掛金に見合ったものを取り損なったか。

84 乗物昇も紺の武士風

父なん都の大金持、母はやことなき大名の娘、いまは子の代にかはりて化粧料も中絶し、親のゆつりもから箱也。されと紺の六尺はやめす。

△「武士風」「化粧料にも」

○化粧料　ここでは母親が実家からの仕送り。○紺の六尺　紺色の六尺褌。通常は晒木綿を着用することを考えれば高級品か。

85 蛍見のつれははつして柴屋町

京の金持の気随意もの、いつもの事なれはしゐてもさがさす。

△「はづして」「さかさす」

◎「蛍見」（夏）「柴屋町」（恋）

○柴屋町　滋賀県大津市長等にあった遊廓。

86 泥亀（スホン）の香嗅（カザ）に落る親の日

宇治丸は皮こはくておかしからす。蛍見かとつ（ママ）け、すほんの望なり。はた今くいたてられて終には親の日も落たり。

※「かとつけ」は「かこつけ」の誤記か。

△「香嗅」「蛍見はかとつけ」「望也」「はたより」

○宇治丸　鰻の鮨や蒲焼で宇治の名物。ここでは「香嗅」とあるので蒲焼か。○親の日　親の命日。本来は精進日。

87 腹はかりいかうて弱き田舎関

是は大坂の句。丸山か類。

△「田舎関（セキ）」

◎「田舎関」から相撲で秋。

○いかう　いかし。大きいこと。○丸山　延宝頃の大関、丸山（仁王）仁太夫か。京都の上覧相撲で、初代横綱といわれる明石志賀之助に敗れた（『嬉遊笑覧』）。

88 開帳くとき石山のあき（秋也）

度々の開帳にて少し信心はおとれり。

△「秋」傍記なし。「少（シ）」

◎「あき」（秋）

○石山　滋賀県大津市の石山寺。

89 油あげ岩間の鹿のかぎに出て

煮うりの油あげ、昆（ママ）蒻の田楽よりははやる。

△「かぎ出て」「田楽ゟ」

◎「鹿」（秋）

○岩間　岩間寺。石山寺の南東約五キロにある正法寺の通称。

90 新生霊（アラシライ）に焼場ふすふる

玉まつりの比、寺参のかへるさにかならす焼場の烟を見る。常より猶哀に覚ゆ。

◎「新生霊」（秋）

○新生霊　新精霊。死後はじめて盆にまつられる霊。

91 世の中は躍の上の月の影

世上をうつけにしたる句也。下手のならぬ所也。

△「踊」

◎「躍」「月の影」（秋）

○躍　盆踊り。○うつけにしたる　ばかにした。

92 さらり〳〵とところてん喰ふ

無二無三の句。

△「喰ㄱ」

◎「ところてん」（夏）

名ウ

93 半襟に打緒かけたる馬士の首

馬子の首の打緒はいかなる物をやかけゝん、時の間もはつさす。

94 品川なみにこねる河崎

こねるの一字、白髪をわかやかせり。

○こねる　ごねる。ここでは駄賃について折り合いをつけないこと。

○白髪をわかやかせり　白髪の老人が、馬方との口論で興奮するさまをいうと同時に、「ごねる」の語が本句の眼目であることも意味する。

95 挑灯を消せは海から明かゝり

明かたの景也。あか〳〵と見るかことし。家際(ママ)卿のうたにあけわたるすへの松山ほの〳〵と浪にはなるゝよこ雲の空。

※「あか〳〵」は「あり〳〵」とも読める。

△「明方」「景色」「あり〳〵」「如し」「家際卿ノ歌ニ」「明わたる」

○あけわたる　藤原家隆「霞たつすゑの松山ほのぼのと波にはなる横雲の空」（新古今・春上・三七）ほか、歌枕名寄等にも載るが「あけわたる」の形は見えない。

96 雀を起す鳩の朝起

97 した〳〵と調子静にたまり雪

△「雪（ユキ）」

◎「たまり雪」（冬）

98 南天痩て風にひよろつく

詩中ノ昼(ママ)。

※「昼」は「画」か。

◎「南天」（秋）ここでは「風にひよろつく」とあることから、季節が移ったとして冬とみるべきか。

99 煤びたる西教寺派の軒の花

くずやの寺の焼しめたる香の匂ひ、物ふりたる庭の南天、筧のたまり水にどひやうしなる竹柄杓、慥なる西教寺派の寺なり。

△「寺也」

◎「花」（春）

○西教寺　滋賀県大津市にある、西教寺を総本山とする天台宗の一派。真盛を祖とする。○くずやの寺　草ぶきの屋根の寺。○どひょうし　突拍子。

100 十七年も蝶々の夢

一句の追善。

◎「蝶々」（春）

○十七年　芭蕉一七回忌のこと。